

「四季・植物」 31 南天

学名 *Nandina domestica* Thunb.
メギ科の常緑低木
漢名「南天竹」「南天燭」から名付いた。

郷土資料から見た「南天」のあれこれ

南天は音が「難転」に通じることから、昔から災厄を払う縁起植物として植えられてきた。実は秋から冬にかけて赤く熟し、センリョウやマンリョウと共に正月の飾りや切り花として欠かせないものである。

「実を煎じて飲むと咳止めや風邪の薬になる」(「柏崎市史資料集 民俗篇」)といい、漢方では熟果を干したものを南天実・南天竹子と呼んで咳止めや百日咳に用いるが、果実は苦く毒性がある。葉を干したものは南天葉と呼ばれ、扁桃炎のうがい薬や入浴剤に用いられる。

また南天の葉は防腐によいとされ、赤飯や魚のかいしきに使われた。現在でも祝儀の赤飯の包装紙には、南天の絵が描かれることが多い。

参考資料

「図説 花と樹の大辞典」	植物文化研究会・雅麗篇	1996	「日本大百科全書」	小学館発行	1994
「図説牧野和漢薬草大図鑑」	北隆館発行	1988	「日本民俗大辞典」	吉川弘文館発行	1999
「柏崎市史資料集 民俗篇」	柏崎市史編さん委員会編	1986	「花の大歳時記」	角川書店発行	1990
「図説江戸料理事典」	松井幸子著	1996	「花卉園芸大百科一花木」	農山漁村文化協会	2002